

株式会社 精研 正会員 田原 学

近畿大学理工学部 社会環境工学科 正会員 岡田 昌彰

1. 研究の背景と目的

2005 年に御坂サイフォン(図-2.図-3)が土木学会選奨土木遺産に認定された。淡山疏水施設の 1 つであるこの構造物において技術面の検討はされているが、開発背景については行われていない。また既存文献においても、政府の疏水開発意図に関する記述が無いことから、本研究において淡山疏水および播州葡萄園の関連資料から、同疏水と葡萄園の関連を検討することにより、疏水開発の歴史的意義を明らかにすることを目的とする。本研究で取扱う淡山疏水とは、淡河疏水と山田疏水の総称である。

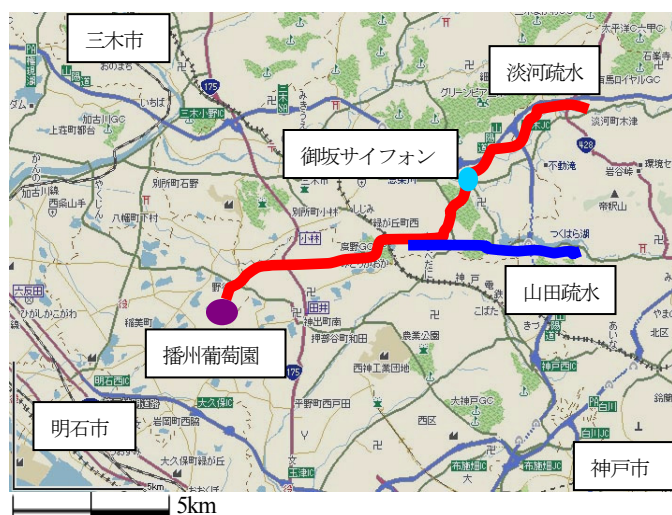


図-1 淡山疏水および播州葡萄園分布図



図-2 サイフォン橋

図-3 サイフォン管

2. 殖産興業の下で開設された三田育種場

明治政府が展開する殖産興業政策の下での内務省における勸業政策は、官が産業において実例を全国へ向けて示し、その成果を見た民によって全国に普及させる狙いがある模範政策の導入を含み、農業においてもその煽りを受け、同省勸農局が内藤新宿試験場や三田育種場を設置した。後に大蔵省大書記官となる前田正名によって東京に開設された

同育種場にて、茶をはじめとする国産優良作物、外国から輸入した果実、輸出用作物などが栽培された。同育種場の性格は、前田による開園の挨拶の中から輸出を意識した場であることが窺え、また西洋農具の交換市も行われたことから、西洋農業伝播の拠点とされていた。

3. 播州葡萄園

初代内務卿の大久保利通を中心として模範政策が展開され、その一環である三田育種場に葡萄が持ち込まれた。理由は国内に根付いて国産ワインが醸造出来れば、当時輸入超過となっていた輸入ワインの抑制、米不足から米節約のために米から作る清酒の代用としてワインが考案されたこと、また大久保によって提起されていた直輸出構想から外貨獲得の動きがあったためである。しかし、同育種場においての葡萄栽培は寒さの影響などにより、1879 年に明治の園芸家である福羽逸人によって栽培不可と報告される。そのため適栽地を西日本に求めた結果、兵庫県加古郡印南新村にて、1880 年に国営播州葡萄園が開設される。同園においても、葡萄栽培や国産ワインの醸造の実例を示すことが主目的であったことから、栽培方法や品種の選定、ワインの醸造などの研究、また苗の各地への配布が行われた。

同園の政府の注目度の高さは、同園への政府関係者の視察状況(表-1)や、醸造場(図-4)を始めとして園路として活用された畑と醸造場を結ぶ馬車道(図-6. 図-7)、ガラス温室(図-5)、葡萄畑の排水を目的とした暗渠の構築などへの政府主体の本格的な設備投資から窺える。また、多くの設備は葡萄の栽培方法と同様、フランスを模範としていた。そして生産能力が向上すると共に、醸造場やガラス温室の増築が行われ、ワインの増産を促進していった。

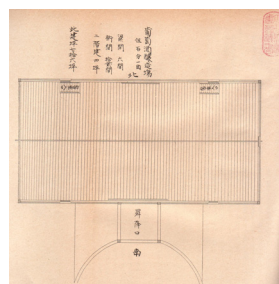


図-4 醸造場
(農務類末第 6 巻 1957 年より)

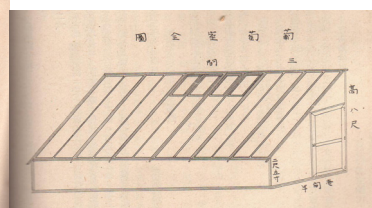


図-5 ガラス温室
(農務類末第 6 巻 1957 年より)

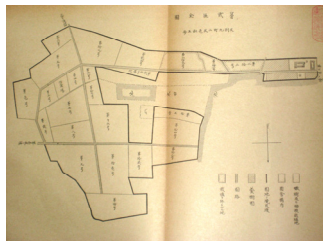


図-6 1881年の葡萄園図
(農務顛末第6巻 1957年より)



図-7 現在の馬車道跡

開園当初は経営状況が順調であったが、1885年に園内に害虫であるフィロキセラの発生により莫大な被害を受けた。また1881年に大蔵卿の松方正義を中心として政変が起こり、軍事産業の拡充を図った松方によって官営事業の民間払い下げが進められ、同園も1888年に前田正名に払い下げられた。払い下げ後の同園経営は、前田が同年山梨県知事に任命されたことにより現地を離れたことから、国内で初めて人造肥料を開発した多木久米次郎らに委託されるが、天災や地価高騰、葡萄の収益性の低下によって経営が悪化し、廃園に至った。

表-1 播州葡萄園の経過と政府関係者の視察状況

1877	三田育種場開設
1880	国営播州葡萄園、印南新村で開園
1881	内務省大書記官田中芳男が葡萄園視察
1882	農商務省大輔品川弥次郎が葡萄園視察
1883	播州葡萄園、農務局の直属機関となる
	大蔵卿松方正義、収穫直前の葡萄園視察
	西郷従道農商務卿、葡萄園視察
	園内に50坪の灌漑用ため池築造
1886	前田正名に播州葡萄園と神戸オリーブ園の経営委託
1888	葡萄園にて淡河疏水の起工式が行われる
	淡河疏水工事開始
	前田正名に播州葡萄園と神戸オリーブ園を払い下げ
	多木久米次郎、前田正名の委託により葡萄園の経営に携わる
1890	登録商標「播州葡萄園」登録
1893	葡萄園池増築
1895	多木久米次郎に園内のアカシヤの木売却
1896	経営困難に陥り、廃園同様に

4. 淡河疏水開発

播州葡萄園が開設された兵庫県加古郡印南地方は元来、水利が悪く、旱魃による農作物への被害が多い地方であった。江戸時代から姫路藩によって奨励され主産業となっていた綿作が、明治に入り神戸港の開港と同時に輸入された安価な外国産綿に押されたこと、また地租改正による不当地租の苦しみから地元住民を中心に疏水懇願運動が盛んとなる。この地元住民の窮状に加え、政府の動きとしては当時葡萄園にて猛威をふるっていたフィロキセラの駆虫法として、フランスにおいて当時の最良の駆虫法として灌水法が導入されていたことから、同園においてもフランスを模

範とした栽培技術や施設同様、駆虫法もフランスに倣い、灌水法の導入が考案された。そのため水が必要となり、疏水事業の必要性が検討され、また官営事業の払い下げが進む松方財政下において、松方が同園の開設を推した1人であったことなどかた、同園の害虫被害からの救済が図られた。結果として資金難で実施不可であった山田疏水事業を、疏水路の変更により淡河疏水事業とし、国庫貸付金の許可が下ったことで、1888年播州葡萄園にて淡河疏水事業の起工式が行われた。同疏水事業では、英国人技師パーマーの計画の下、当時において画期的なサイフォン工が導入され、3年に渡る工事の末1991年に開通し、当地域に豊かな水利をもたらした。

この水利によって畑の水田化が進められたことや、多木久米次郎によって安価で肥効の良い米作用肥料の開発によって、印南地方においても米作が増加したことなどから再び水不足に至る。結果として、淡河疏水以前に計画されていた山田疏水事業が国庫貸付金や補助金もなく、起債によって1911年に起工された。

5. 結語

本研究では、淡山疏水や播州葡萄園関連の文献から、事実関係の明確化によって淡河疏水事業と播州葡萄園の関連を示し、淡河疏水開発の主目的として播州葡萄園支援の可能性を導き出した。

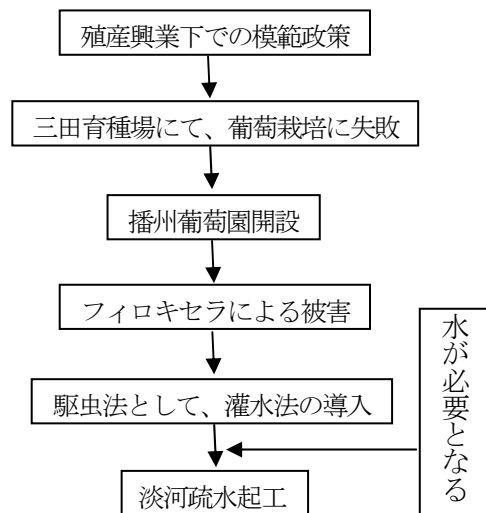


図-8 本研究のまとめ

【参考文献】

- 1) 兵庫県淡河川山田川疏水百年史：淡山百周年記念史編集委員会 1990
- 2) 稲美町史：稲美町 1982
- 3) 果樹栽培全書. 第四：博文館 1896
- 4) 農務顛末第六巻：農林省 1957